或恋愛小説

——或は「恋愛は至上なり」——

芥川龍之介

ある婦人雑誌社の面会室。

主筆　でっぷり肥(ふと)った四十(し)前後の紳士(しんし)。

堀川保吉(ほりかわやすきち)　主筆の肥っているだけに痩(や)せた上にも痩せて見える三十前後の、——ちょっと一口には形容出来ない。が、とにかく紳士と呼ぶのに躊躇(ちゅうちょ)することだけは事実である。

主筆　今度は一つうちの雑誌に小説を書いては頂けないでしょうか？　どうもこの頃は読者も高級になっていますし、在来の恋愛小説には満足しないようになっていますから、……もっと深い人間性に根ざした、真面目(まじめ)な恋愛小説を書いて頂きたいのです。

保吉　それは書きますよ。実はこの頃婦人雑誌に書きたいと思っている小説があるのです。

主筆　そうですか？　それは結構です。もし書いて頂ければ、大いに新聞に広告しますよ。「堀川氏の筆に成れる、哀婉極（あいえんきわま）りなき恋愛小説」とか何とか広告しますよ。

保吉　「哀婉極りなき」？　しかし僕の小説は「恋愛は至上（しじょう）なり」と云うのですよ。

主筆　すると恋愛の讃美（さんび）ですね。それはいよいよ結構です。厨川（くりやがわ）博士（はかせ）の「近代恋愛論」以来、一般に青年男女の心は恋愛至上主義に傾いていますから。……勿

論近代的恋愛でしょうね？

保吉　さあ、それは疑問ですね。近代的懐疑（かいぎ）とか、近代的盗賊とか、近代的白髪染（しらがぞ）めとか——そう云うものは確かに存在するでしょう。しかしどうも恋愛だけはイザナギイザナミの昔以来余り変らないように思いますが。

主筆　それは理論の上だけですよ。たとえば三角関係などは近代的恋愛の一例ですからね。少くとも日本の現状では。

保吉　ああ、三角関係ですか？　それは僕の小説にも三角関係は出て来るのです。……ざっと筋を話して

見ましょうか？

主筆　そうして頂ければ好都合です。

保吉　女主人公は若い奥さんなのです。外交官の夫人なのです。勿論東京の山の手の邸宅に住んでいるのですね。背のすらりとした、ものごしの優しい、いつも髪は——一体読者の要求するのはどう云う髪に結った女主人公ですか？

主筆　耳隠しでしょう。

保吉　じゃ耳隠しにしましょう。いつも髪を耳隠しに結った、色の白い、目の冴え冴えしたちょっと唇に癖のある、——まあ活動写真にすれば栗島澄子の

役所(やくどころ)なのです。夫の外交官も新時代の法学士ですから、新派悲劇じみたわからずやじゃありません。学生時代にはベエスボールの選手だった、その上道楽に小説くらいは見る、色の浅黒い好男子なのです。新婚の二人は幸福に山の手の邸宅に暮している。一しょに音楽会へ出かけることもある。銀座通りを散歩することもある。……

主筆　勿論震災(しんさい)前でしょうね？

保吉　ええ、震災のずっと前です。……一しょに音楽会へ出かけることもある。銀座通りを散歩することもある。あるいはまた西洋間(せいようま)の電燈の下に無言(むごん)の微笑

ばかり交わすこともある。女主人公はこの西洋間を「わたしたちの巣」と名づけている。壁にはルノアルやセザンヌの複製などもかかっている。ピアノも黒い胴を光らせている。鉢植えの椰子も葉を垂らしている。——と云うと多少気が利いていますが、家賃は案外安いのですよ。

主筆　そう云う説明は入らないでしょう。少くとも小説の本文には。

保吉　いや、必要ですよ。若い外交官の月給などは高の知れたものですからね。

主筆　じゃ華族の息子におしなさい。もっとも華族

ならば伯爵か子爵ですね。どう云うものか公爵や侯爵は余り小説には出て来ないようです。

保吉　それは伯爵の息子でもかまいません。とにかく西洋間さえあれば好いのです。その西洋間か、銀座通りか、音楽会かを第一回にするのですから。……しかし妙子は――これは女主人公の名前ですよ。――音楽家の達雄と懇意になった以後、次第にある不安を感じ出すのです。達雄は妙子を愛している、――そう女主人公は直覚するのですね。のみならずこの不安は一日ましにだんだん高まるばかりなのです。

主筆　達雄はどう云う男なのですか？

保吉　達雄は音楽の天才です。ロオランの書いたジャン・クリストフとワッセルマンの書いたダニエル・ノオトハフトとを一丸（いちがん）にしたような天才です。が、まだ貧乏だったり何かするために誰にも認められていないのですがね。これは僕の友人の音楽家をモデルにするつもりです。もっとも僕の友人は美男（びなん）ですが、達雄は美男じゃありません。顔は一見ゴリラに似た、東北生れの野蛮人（やばんじん）なのです。しかし目だけは天才らしい閃（ひらめ）きを持っているのですよ。彼の目は一塊（いっかい）の炭火（すみび）のように不断の熱を孕（はら）んでいる。――そう云う目をしているのですよ。

主筆　天才はきっと受けましょう。

保吉　しかし妙子は外交官の夫に不足のある訣(わけ)ではないのです。いや、むしろ前よりも熱烈に夫を愛しているのです。夫もまた妙子を信じている。これは云うまでもないことでしょう。そのために妙子の苦しみは一層つのるばかりなのです。

主筆　つまりわたしの近代的と云うのはそう云う恋愛のことですよ。

保吉　達雄はまた毎日電燈さえつけば、必ず西洋間へ顔を出すのです。それも夫のいる時ならばまだしも苦労はないのですが、妙子のひとり留守(るす)をしている時

にもやはり顔を出すのでしょう。妙子はやむを得ずそう云う時にはピアノばかり弾（ひ）かせるのです。もっとも夫のいる時でも、達雄はたいていピアノの前へ坐らないことはないのですが。

主筆　そのうちに恋愛に陥るのですか？

保吉　いや、容易に陥らないのです。しかしある二月の晩、達雄は急にシュウベルトの「シルヴィアに寄する歌」を弾きはじめるのです。あの流れる炎（ほのお）のように情熱の籠（こも）った歌ですね。妙子は大きい椰子（やし）の葉の下にじっと耳を傾けている。そのうちにだんだん達雄に対する彼女の愛を感じはじめる。同時にまた目の前

へ浮かび上った金色（こんじき）の誘惑を感じはじめる。もう五分、――いや、もう一分たちさえすれば、妙子は達雄の腕（かいな）の中へ体を投げていたかも知れません。そこへ――ちょうどその曲の終りかかったところへ幸い主人が帰って来るのです。

主筆　それから？

保吉　それから一週間ばかりたった後（のち）、妙子はとうとう苦しさに堪え兼ね、自殺をしようと決心するのです。が、ちょうど妊娠（にんしん）しているために、それを断行する勇気がありません。そこで達雄に愛されていることをすっかり夫に打ち明けるのです。もっとも夫を苦し

めないように、彼女も達雄を愛していることだけは告白せずにしまうのですが。

主筆　それから決闘にでもなるのですか？

保吉　いや、ただ夫は達雄の来た時に冷かに訪問を謝絶（しゃぜつ）するのです。達雄は黙然（もくねん）と唇（くちびる）を噛んだまま、ピアノばかり見つめている。妙子は戸の外に佇（たたず）んだなりじっと忍び泣きをこらえている。――その後二月（のちふたつき）とたたないうちに、突然官命を受けた夫は支那（しな）の漢口（ハンカオ）の領事館へ赴任（ふにん）することになるのです。

主筆　妙子も一しょに行くのですか？

保吉　勿論一しょに行くのです。しかし妙子は立つ

前に達雄へ手紙をやるのです。「あなたの心には同情する。が、わたしにはどうすることも出来ない。お互に運命だとあきらめましょう。」――大体そう云う意味ですがね。それ以来妙子は今日までずっと達雄に会わないのです。

主筆　じゃ小説はそれぎりですね。

保吉　いや、もう少し残っているのです。妙子は漢口（ハンカオ）へ行った後（のち）も、時々達雄を思い出すのですね。のみならずしまいには夫よりも実は達雄を愛していたと考えるようになるのですね。好（い）いですか？　妙子を囲んでいるのは寂しい漢口（ハンカオ）の風景ですよ。あの唐（とう）の崔顥（さいこう）

の詩に「晴川歴歴漢陽樹　芳草萋萋鸚鵡洲」と歌われたことのある風景ですよ。妙子はとうとうもう一度、――一年ばかりたった後ですが、――達雄へ手紙をやるのです。「わたしはあなたを愛していた。今でもあなたを愛している。どうか自ら欺いていたわたしを可哀そうに思って下さい。」――そう云う意味の手紙をやるのです。その手紙を受けとった達雄は……

主筆　早速支那へ出かけるのでしょう。

保吉　とうていそんなことは出来ません。何しろ達雄は飯を食うために、浅草のある活動写真館のピアノを弾いているのですから。

主筆　それは少し殺風景ですね。

保吉　殺風景でも仕かたはありません。達雄は場末（ばすえ）のカフェのテエブルに妙子の手紙の封を切るのです。窓の外の空は雨になっている。達雄は放心したようにじっと手紙を見つめている。何だかその行（ぎょう）の間（あいだ）に妙子の西洋間（せいようま）が見えるような気がする。ピアノの蓋（ふた）に電燈の映った「わたしたちの巣」が見えるような気がする。……

主筆　ちょっともの足りない気もしますが、とにかく近来の傑作ですよ。ぜひそれを書いて下さい。

保吉　実はもう少しあるのですが。

主筆　おや、まだおしまいじゃないのですか？

保吉　ええ、そのうちに達雄は笑い出すのです。と思うとまた忌（いま）いましそうに「畜生（ちくしょう）」などと怒鳴（どな）り出すのです。

主筆　ははあ、発狂したのですね。

保吉　何、莫迦（ばか）莫迦（ばか）しさに業（ごう）を煮（に）やしたのです。それは業を煮やすはずでしょう。元来達雄は妙子などを少しも愛したことはないのですから。……

主筆　しかしそれじゃ。……

保吉　達雄はただ妙子の家（うち）へピアノを弾きたさに行ったのですよ。云わばピアノを愛しただけなのです

よ。何しろ貧しい達雄にはピアノを買う金などはないはずですからね。

主筆　ですがね、堀川さん。

保吉　しかし活動写真館のピアノでも弾いていられた頃はまだしも達雄には幸福だったのです。達雄はこの間の震災以来、巡査になっているのですよ。護憲運動（ごけんうんどう）のあった時などは善良なる東京市民のために袋叩（ふくろだた）きにされているのですよ。ただ山の手の巡回中、稀（まれ）にピアノの音（ね）でもすると、その家の外に佇（たたず）んだまま、はかない幸福を夢みているのですよ。

主筆　それじゃ折角（せっかく）の小説は……

保吉　まあ、お聞きなさい。妙子はその間も漢口（ハンカオ）の住いに不相変（あいかわらず）達雄を思っているのです。いや漢口（ハンカオ）ばかりじゃありません。外交官の夫の転任する度に、上海（シャンハイ）だの北京（ペキン）だの天津（テンシン）だのへ一時の住いを移しながら、不相変（あいかわらず）達雄を思っているのです。勿論もう震災の頃には大勢（おおぜい）の子もちになっているのですよ。ええと、――年児（としご）に双児（ふたご）を生んだものですから、四人の子もちになっているのですよ。おまけにまた夫はいつのまにか大酒飲みになっているのですよ。それでも豚（ぶた）のように肥（ふと）った妙子はほんとうに彼女と愛し合ったものは達雄だけだったと思っているのですね。恋愛は実際至上

なりですね。さもなければとうてい妙子のように幸福になれるはずはありません。少くとも人生のぬかるみを憎まずにいることは出来ないでしょう。——どうです、こう云う小説は？

主筆　堀川さん。あなたは一体真面目なのですか？

保吉　ええ、勿論真面目です。世間の恋愛小説を御覧なさい。女主人公はマリアでなければクレオパトラじゃありませんか？　しかし人生の女主人公は必ずしも貞女じゃないと同時に、必ずしもまた婬婦でもないのです。もし人の好い読者の中に、一人でもああ云う小説を真に受ける男女があって御覧なさい。もっとも

恋愛の円満（えんまん）に成就（じょうじゅ）した場合は別問題ですが、万一失恋でもした日には必ず莫迦莫迦（ばかばか）しい自己犠牲（じこぎせい）をするか、さもなければもっと莫迦莫迦しい復讐的精神を発揮しますよ。しかもそれを当事者自身は何か英雄的行為のようにうぬ惚（ぼ）れ切ってするのですからね。けれどもわたしの恋愛小説には少しもそう云う悪影響を普及する傾向はありません。おまけに結末は女主人公の幸福を讃美（さんび）しているのです。

主筆　常談（じょうだん）でしょう。……とにかくうちの雑誌にはとうていそれは載せられません。

保吉　そうですか？　じゃどこかほかへ載せて貰い

ます。広い世の中には一つくらい、わたしの主張を容（い）れてくれる婦人雑誌もあるはずですから。

保吉の予想の誤らなかった証拠はこの対話のここに載ったことである。

（大正十三年三月）

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房
１９８７（昭和62）年２月24日第１刷発行
１９９５（平成７）年４月10日第６刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
１９７１（昭和46）年３月〜１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９９年１月８日公開
２００４年３月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。